―国内動向―

1　東京都･大阪市中央卸売市場の需給動向（令和8年10月）

【ポイント】

●気温は、北日本、東日本、西日本、沖縄・奄美ではかなり高かった。降水量は、東日本日本海側、西日本日本海側、沖縄･奄美では多かった。日照時間は、沖縄･奄美ではかなり多かった。
●東京都中央卸売市場における野菜の入荷量は11万5434トン、前年同月比103.3%、価格は１キログラム当たり317円、同109.5%となった。
●大阪市中央卸売市場における野菜の入荷量は４万619トン、前年同月比104.1%、価格は１キログラム当たり277円、同102.6%となった。
●関東甲信・東海地方における８月末から10月にかけての長雨の影響から、10月上旬は多くの品目で生育が遅れ品薄となったが、天候の回復により下旬にかけて入荷は増量に転じた。

（1）気象概況

上旬から中旬にかけて本州付近を中心に移動性高気圧に覆われることが多く、晴れの日が多かった。このため、月降水量は北日本太平洋側でかなり少なく、東日本太平洋側で少なかった。一方、下旬に台風第30号およびそれから変わった温帯低気圧により湿った空気の影響を受けた東・西日本日本海側と沖縄・奄美では多かった。月間日照時間は、上旬から中旬にかけて、移動性高気圧に覆われやすかったため、沖縄・奄美でかなり多く、北・東日本日本海側と北・東・西日本太平洋側で多かった。暖かい空気に覆われやすい日が多かったことに加え、北日本では上旬から中旬、東・西日本と沖縄・奄美では中旬から下旬にかけて、低気圧や前線に向かって南から暖かい空気が流れ込みやすかった。このため、月平均気温は全国的にかなり高かった。

地球温暖化などの長期的な気候変動の監視に用いる15地点の観測値による日本の月平均気温(注)の基準値からの偏差は+1.51度で、2024年の+2.21度に次いで、統計を開始した1898年以降の10月として２位の高温となった。

○平均気温は、北日本、東日本、西日本、沖縄・奄美ではかなり高かった。
○降水量は、東日本日本海側、西日本日本海側、沖縄・奄美では多かった。北日本太平洋側ではかなり少なかった。東日本太平洋側では少なかった。北日本日本海側、西日本太平洋側では平年並みだった。
○日照時間は、沖縄・奄美ではかなり多かった。北日本日本海側、北日本太平洋側、東日本日本海側、東日本太平洋側、西日本太平洋側では多かった。西日本日本海側では平年並みだった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図１の通り。
（出典：気象庁HP「2026年10月の天候」）

(注) 観測データの均質性が長期間確保でき、かつ都市化等による環境の変化が比較的小さい地点から、地域的に偏りなく分布するように選定した15地点（網走、根室、寿都、山形、石巻、伏木、飯田、銚子、境、浜田、彦根、宮崎、多度津、名瀬、石垣島）の気象台などの観測値を用いた統計。

図１　気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	
東日本					日本海側 太平洋側				
西日本									

資料：気象庁「10月の天候」



（２）東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷量は11万5434トン、前年同月比103.3％、価格は１キログラム当たり317円、同109.5%となった（表１）。

表１　東京都中央卸売市場の動向（10月速報）

品　目	入荷量（t）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	115,434	103.3	96.3	317	109.5	117.4	348	324	281
だいこん	9,362	94.6	89.8	127	118.6	116.1	133	139	112
にんじん	9,039	124.8	116.4	119	78.7	84.0	127	117	113
はくさい	9,824	71.7	69.0	141	168.4	162.4	195	142	105
キャベツ類	15,937	102.1	98.4	165	185.3	171.5	184	189	128
ほうれんそう	1,264	104.3	97.3	710	105.0	113.2	989	748	554
ねぎ	4,876	107.4	101.4	364	89.1	90.8	423	346	316
ブロッコリー	2,799	126.2	131.0	521	91.0	100.1	633	551	425
レタス類	6,160	75.2	75.3	376	216.8	192.9	469	363	280
きゅうり	4,933	114.0	99.0	504	110.4	125.3	556	518	434
なす	2,458	94.8	92.0	438	121.2	126.3	464	450	399
トマト	4,774	127.4	108.9	570	82.7	93.4	554	600	559
ピーマン	2,051	102.6	98.1	611	110.2	130.8	612	662	573
ばれいしょ	6,947	118.3	105.3	145	73.5	101.0	145	147	144
さといも	736	99.7	79.6	375	94.7	111.6	415	382	336
たまねぎ	10,977	156.8	127.0	86	42.1	67.4	89	88	82

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注１：平年比は過去５カ年（令和３～７年）平均との比較。
注２：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの９市場のデータである。

根菜類は、だいこんは終盤の北海道産、青森産は入荷が順調だったが、煮炊き需要が高まる中旬以降、後続の関東産が生育期の天候不順から不安定ながらも出荷が始まり価格は下落した（図２）。

葉茎菜類は、レタスの価格は９月の長雨の影響で長野産が少なく品薄が続いた。中旬以降、茨城産など秋冬産地に切り替わり、増量に伴って価格は下落した（図３）。

果菜類は、トマトは夏秋産地からの出荷が続く中、中旬以降、生育が良好な西南暖地の出荷も重なり豊作傾向となり価格は下落傾向となった（図４）。

土物類は、たまねぎは北海道の夏季の気温や降雨が適度だったことから、豊作基調で潤沢に入荷し、価格は軟調に推移した（図５）。

なお、品目別の詳細については表２の通り。

図２　だいこんの入荷量と卸売価格の推移

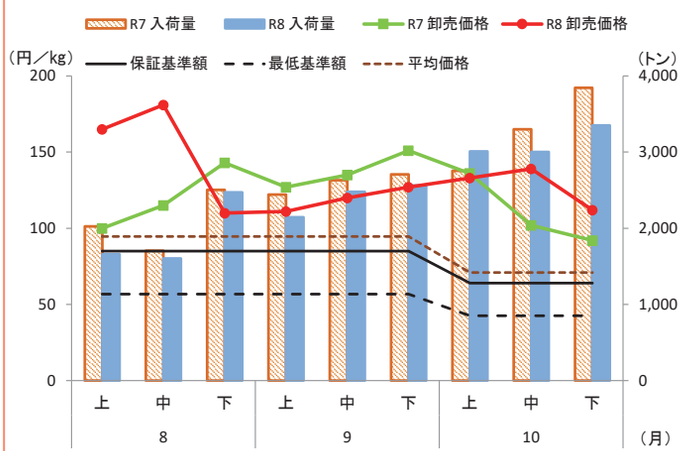


図３　レタスの入荷量と卸売価格の推移

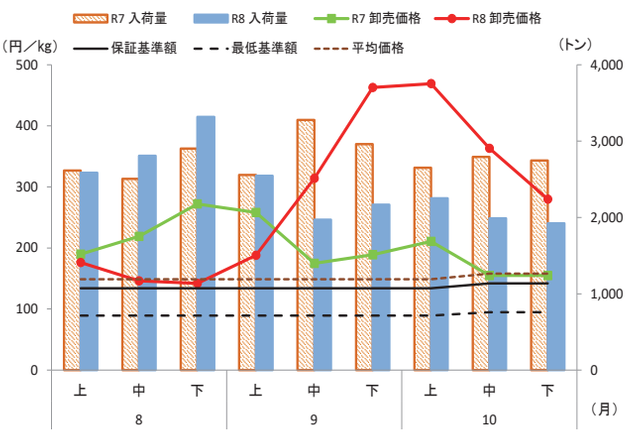


図４　トマトの入荷量と卸売価格の推移

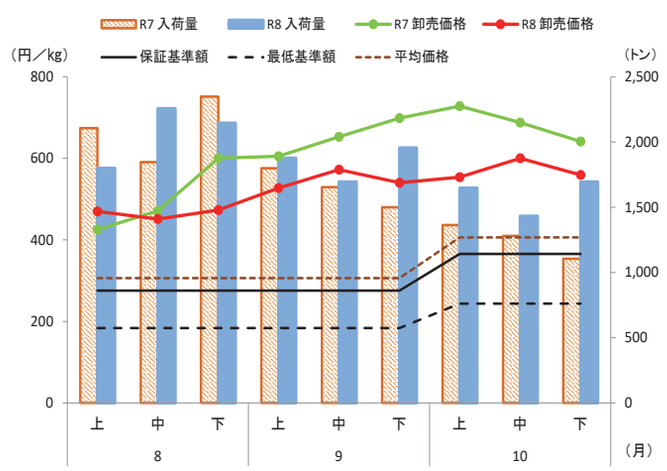
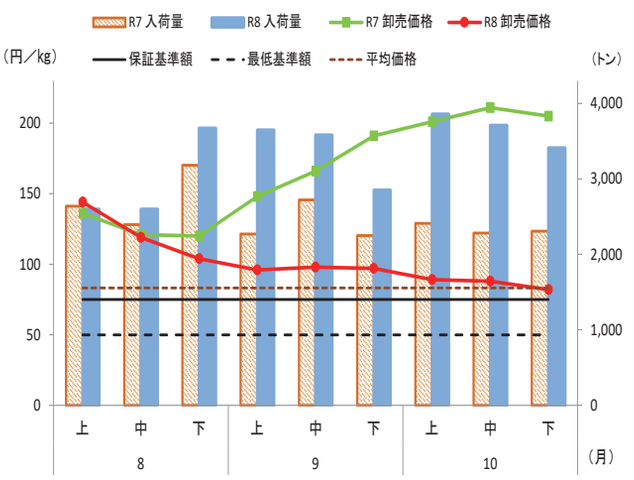


図５　たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

注１：上記グラフの「卸売価格」とは、東京都中央卸売市場（豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウン）の平均である。

注２：上記グラフの「平均価格（過去６カ年の卸売市場の平均を基に物価指数などを加味した価格）」、「保証基準額」および「最低基準額」は、指定野菜価格安定対策事業における対象市場群のうち関東ブロック（茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県、長野県及び静岡県）の数値である。

注３：価格差補給交付金の交付に当たっては、「平均販売価額」（指定産地から対象市場等に出荷された指定野菜の卸売価格を旬別に加重平均した価格）が「保証基準額」を下回った場合に交付されるため、上記の各表において表示する卸売価格が保証基準額を下回った場合でも、交付対象になるとは限らない。

表２　品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	10月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	青森産、北海道産中心の入荷であった。青森産の作付面積は前年を上回り、極端な高温がなく適度な降雨もあったことから、生育は順調であった。北海道産の作付面積は前年並みで、地域によっては降雨の影響による遅延があったが、生育はおおむね順調であった。後続の千葉産、神奈川産は、降雨や日照不足の影響により、生育不良や遅延が見られた。総入荷量は、前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は、平年並みであった前年を大幅に上回った。
	にんじん 	北海道産中心の入荷であった。北海道産の作付面積は前年並みで、道南地区はやや降雨の影響があったが、歩留まりもよく生育はおおむね順調であった。後続の千葉産が度重なる豪雨と日照不足により、生育遅延や根部障害により作柄不良だったため、北海道産は終盤だったが入荷量が延びた。輸入の中国産は、前年を2割以上下回った。総入荷量は、少なかった前年を2割以上上回り、平年を大幅に上回った。 価格は、中旬以降やや落ち着いたものの、やや高値で推移した前年を2割以上下回り、平年を大幅に下回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産が中心の入荷であった。長野産の作付面積は前年並みだが、9月の長雨の影響により生育が停滞し、作柄は不良で、一部で病害が散見された。後続の茨城産は、長期にわたる降雨や台風、曇天の影響で、定植の遅れと生育遅延が見られる。総入荷量は、少なかった前年からさらに3割近く下回り、平年を3割強下回った。 価格は上旬に高騰し、下旬に向けて落ち着いたものの、前年、平年ともに6割以上上回った。
	キャベツ類 	群馬産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、台風および曇雨天の影響で滞水しやすい圃場を中心に生育は停滞しており、気温の低下もあり全体的に小玉傾向であった。後続の千葉産、茨城産、愛知産では、長雨による定植の遅れに加え、日照不足や台風による生育遅延、病害が見られた。総入荷量は、やや少なかった前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。 価格は上旬に高騰し、下旬に急落したものの、やや安値で推移した前年を8割以上上回り、平年を7割以上上回った。
	ほうれんそう 	群馬、茨城、栃木県産等など、関東高冷地から平坦地産中心の入荷であった。群馬産の作付面積は前年並みで、露地、雨よけ作ともに、8月下旬以降の曇雨天により播種作業が遅延し、生育も軟弱徒長傾向気味であり、また病虫害も散見された。茨城産の作付面積は前年並みで、多雨による生育遅延に加えて、一部圃場が冠水などの影響で水分過多の状態であった。栃木産の作付面積は前年並みだが、9月の日照不足の影響で軟弱徒長気味であった。曇雨天後の日照による枯死も散見された。総入荷量は、大幅に少なかった前年をやや上回ったものの、平年をわずかに下回った。 価格は、上旬まで品薄感から高騰していたが、中旬以降は数量の回復により荷動きが停滞した。下旬にかけて大幅に下落したものの、高値で推移した前年をやや上回り、平年をかなり大きく上回った。
	ねぎ 	秋田産を中心に青森産、北海道産などの入荷があった。秋田産の作付面積は前年並みで、定植時の高温・乾燥により葉先の枯れが散見されたが、その後の降雨により回復し、生育は順調である。一部で病虫害が散見された。青森産の作付面積は前年をやや上回り、適度な降雨により生育は順調であるものの、病害が散見された。北海道産の作付面積は前年並みで、降雨による地域差はあるものの、生育はおおむね順調であった。輸入の中国産は、前年を4割以上下回った。総入荷量は、少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに上回った。 価格は、秋商材として需要期に入ったものの、東北産の残量が多く、関東産の出荷開始・増量も重なり、販売は苦戦し、平年並みであった前年をかなりの程度下回った。
	ブロッコリー 	北海道産が中心の入荷であった。北海道産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ、生育は順調であった。後続の関東近郊産地は、長雨による定植の遅れや生育遅延が見られた。西南暖地については、生育はおおむね順調であった。総入荷量は、前年を2割以上上回り、平年を3割強上回った。 価格は、高値で推移した前年をかなりの程度下回り、平年並みとなった。
	レタス類 	茨城産、長野産中心の入荷であった。茨城産の作付面積は前年並みで、9月の多雨および日照不足、台風により定植が遅れ、生育は遅延した。長野産の作付面積は前年並みで、作の終盤となるが、長雨、日照不足による生育遅延で正品率が低下している。総入荷量は、前年、平年ともに2割以上下回った。 価格は、上旬まで高値が続き、中旬以降は落ち着いたものの、やや安値で推移した前年の2倍以上となり、平年を9割以上上回った。

果菜類	きゅうり 	群馬産、埼玉産など、関東産の抑制作中心の入荷であった。群馬産の作付面積は前年並みで、9月の長雨の影響で樹勢が低下し、流れ果や果実の肥大遅れが見られた。また、一部では根張りも悪く、生理障害も散見された。埼玉産の作付面積は前年並みで、日照不足の影響で樹勢が弱く、病害も発生した。低温・多湿の影響による病害が多く、曲がり果も目立つため、正品率は低下している。総入荷量は、少なかった前年を1割以上上回ったものの、平年をわずかに下回った。 価格は、下旬に落ち着いたものの、高値で推移した前年を1割ほど上回り、平年を2割以上上回った。
	なす 	高知産が中心の入荷であった。高知産の作付面積は前年並みで、日照不足の影響はあったものの、極端な気温上昇もなく、生育は順調であったが一部で虫害が散見された。総入荷量は、前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は、下旬に落ち着きを見せ、前年、平年ともに2割強上回った。
	トマト 	北海道産、千葉産、熊本産、福島産などの入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、一部で曇雨天による着色遅れが散見されたものの、生育は順調である。千葉産の作付面積は前年並みで、長雨および日照不足により、生育が悪く着果不良も発生したため全体的に小玉傾向となっている。また、湿度が高かったため防除可能な日が少なく、病害の発生も多くみられた。熊本産の作付面積は前年並みで、9月の低温により生育は遅延傾向である。福島産の作付面積は前年並みで、高温による花落ちなどが散見されるものの、生育はおおむね順調であった。しかし一部で病虫害の発生が散見される。総入荷量は、少なかった前年を3割近く上回り、平年を1割近く上回った。 価格は、中旬に一時的に上がったものの、高値で推移した前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。
	ピーマン 	茨城産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、9月下旬の多雨により定植が遅れ、曇雨天の影響もあり生育は遅延傾向である。後続の高知産、宮崎産は、曇雨天の影響でやや徒長傾向にあるものの、生育はおおむね順調である。総入荷量は、少なかった前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。 価格は、堅調推移となり、高値で推移した前年をさらに1割ほど上回り、平年を3割ほど上回った。
土物類	ばれいしょ 	北海道産が中心の入荷であった。北海道産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ、生育は順調である。サイズはL中心で豊作基調である。総入荷量は、少なかった前年を2割近く上回り、平年をやや上回った。 価格は、月間を通してほとんど動きなく、高値で推移した前年を3割近く下回り、ほぼ平年並みとなった。
	さといも 	埼玉産を中心に、千葉産、愛媛産などの入荷があった。埼玉産の作付面積は前年並みで、生育時期の降雨に恵まれ、肥大は順調で品質は良好である。圃場が乾かないため、収穫はやや遅れ気味である。千葉産の作付面積は前年並みで、多雨の影響で収穫作業が進まず1～2週間遅れていたが、中旬までにほぼ終了した。愛媛産の作付面積は前年並みで、肥大、形状ともに良好で正品率は高い。輸入の中国産は、前年を3割ほど上回っている。総入荷量は前年並みとなったが、平年を2割ほど下回った。 価格は、下旬に向け落ち着きを見せ、高値で推移した前年をやや下回ったものの、平年を1割強上回った。
	たまねぎ 	北海道産を中心にとした入荷であった。作付面積は前年並みで、天候に恵まれ、肥大も良く、サイズはL大中心で豊作である。輸入の中国産は、中国産の輸入は前年を7割近く下回っている。総入荷量は、少なかった前年を5割以上上回り、平年を3割近く上回った。 価格は、潤沢な数量から安値安定となり、高騰した前年を6割近く下回り、平年を3割以上下回った。

（執筆者：東京シティ青果株式会社　平田　実）

（3）大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷量は４万619トン、前年同月比104.1％、価格は１キログラム当たり277円、同102.6％となった（表３）。

品目別の詳細については表４の通り。

表３　大阪市中央卸売市場の動向（10月速報）

品　目	入荷量（t）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	40,619	104.1	97.7	277	102.6	113.0	304	286	246
だいこん	3,335	98.3	90.9	141	118.5	117.2	147	151	123
にんじん	2,850	111.1	94.2	117	78.0	82.5	117	118	115
はくさい	6,257	88.6	91.3	126	153.7	145.0	192	130	94
キャベツ類	5,685	110.6	100.7	157	176.4	161.0	180	175	124
ほうれんそう	383	99.7	93.4	828	95.6	106.3	1,017	895	671
ねぎ	1,197	112.8	108.5	474	95.0	94.5	557	465	412
ブロッコリー	433	113.9	103.3	540	92.6	104.7	638	582	448
レタス類	1,170	71.5	73.5	345	184.5	167.4	470	338	251
きゅうり	1,024	100.3	91.0	459	107.5	118.0	494	481	406
なす	780	97.3	101.6	437	119.1	125.9	459	456	403
トマト	1,778	121.9	127.0	567	85.8	90.0	584	593	537
ピーマン	593	98.3	108.2	609	108.0	121.7	611	652	580
ばれいしょ	2,798	115.3	101.0	136	63.0	101.9	134	142	132
さといも	124	106.0	76.5	435	97.3	124.6	451	449	411
たまねぎ	4,925	127.3	104.9	95	46.1	71.2	97	94	93

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年比は過去５カ年（令和３～７年）平均との比較。
注２：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表４　品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

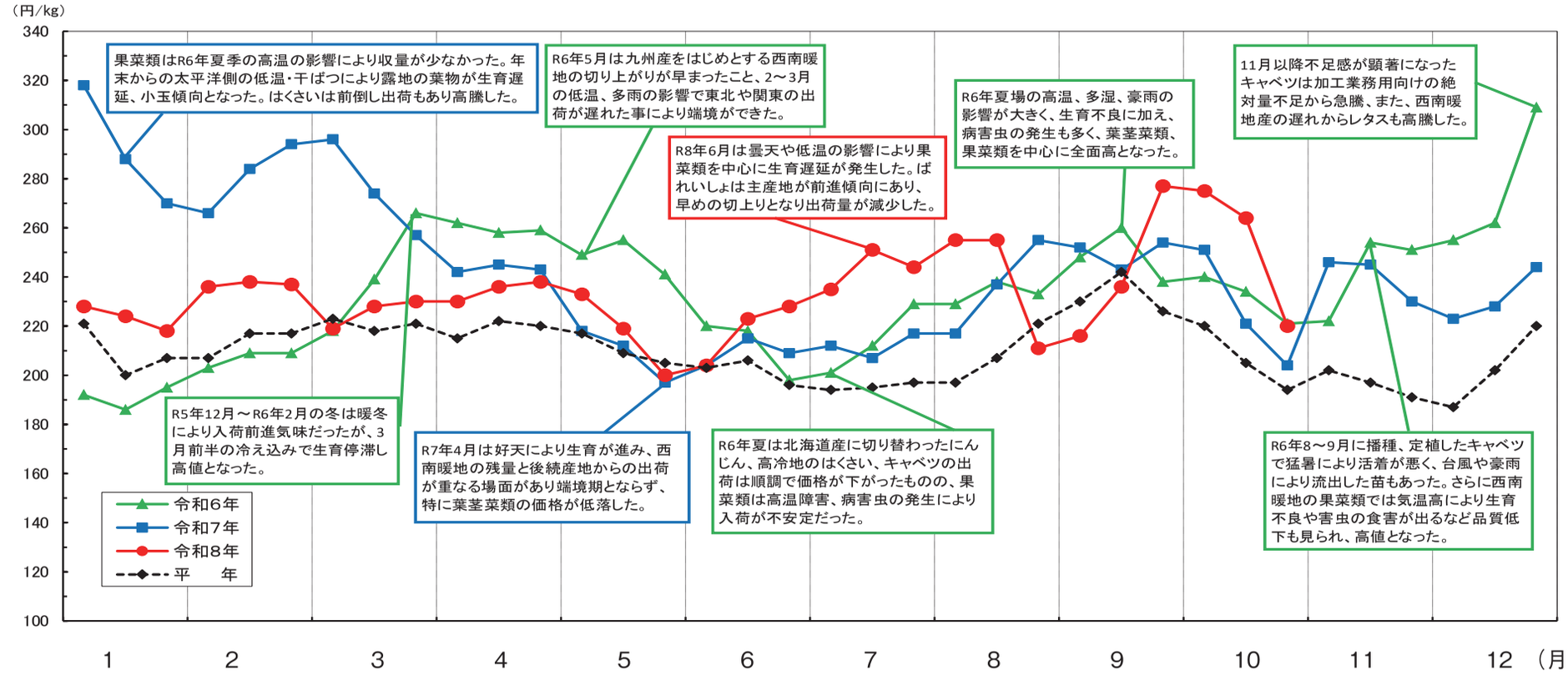
類別	品目	10月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	北海道産が中心となり、青森産、新潟産も主体となる入荷であった。月の前半は岐阜産の残量の入荷もあった。北海道産は産地の残量が多く、旬を追うごとに減量となる中でも順調な入荷が続いた。青森産と新潟産も、全旬を通じて安定した潤沢な入荷となった。岐阜産は切り上がりが早く、月間では前年を大幅に下回った。月間全体の入荷量は、前年をわずかに下回り、平年比をかなりの程度下回った。 価格は、品薄感に加えて、主産地の入荷の中心サイズがLとなったことで、安定した高値で推移した。月間の価格は前年、平年ともに2割近く上回った。
	にんじん 	北海道産中心の入荷であった。当初は早期の切り上げが予想されたが、下旬に道内各産地の入荷が重なり、潤沢な入荷が続いた。輸入の中国産の入荷もあったが、国内産全体の入荷量が潤沢だったため引き合いは強まらず、入荷量は前年よりかなり少なかった。月間全体の入荷量は、前年をかなり大きく上回ったが、平年をやや下回った。 価格は、消費地の気温が高く消費が鈍い状況が続いたため低迷、月間の価格は、前年を2割以上下回り、平年を大幅に下回った。

葉茎菜類	はくさい 	長野産が中心で下旬に後続の茨城産の入荷が始まった。長野産は、上・中旬は前月からの天候不順の影響で生育が進まずに、出荷量が少ない状況が続き、前年を大幅に下回った。下旬は回復傾向となり前年を上回ったが、月間では前年をかなり下回った。茨城産の入荷も順調とは言えず、月間全体の入荷量は前年をかなり大きく下回り、平年もかなりの程度下回った。 価格は、絶対量不足から上旬には高騰したが、旬を追うごとに下落し、下旬には長野産の入荷がピークとなり全体入荷量が増加したため、価格は上旬の半値以下に急落した。しかし月間の価格は前年を5割以上上回り、平年を5割近く上回った。
	キャベツ類 	群馬産を中心に、長野産や茨城産の入荷があった。上・中旬は天候不順で生育が進まずに、産地からの出荷量が少ない状況が続いた。下旬には、生育が回復した群馬産と長野産の残量と後続の茨城産、愛知産の入荷が重なった。月間全体の入荷量は前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに上回った。 価格は、絶対量不足から上・中旬は高騰を続け、一時は前年の2倍ほどの価格にまで上昇した。下旬に価格は下落したが、引き合いは強く高値を維持した。月間の価格は前年を8割近く上回り、平年を6割以上上回った。
	ほうれんそう 	岐阜産が中心となる入荷に、下旬には秋冬産地の和歌山産や福岡産などの入荷も見られた。岐阜産は全旬を通して安定した入荷が続き、月間では前年を上回る入荷量となった。下旬にスタートした秋冬産地の主力産地である福岡産は、生育が遅れ気味で伸びなかった。月間全体の入荷量は前年並みとなったが、平年をかなりの程度下回った。 価格は、上旬までは前月までの高値の影響が残り、1キログラム当たり千円を超えたが、後続産地がスタートすると旬を追うごとに下落した。月間の価格は高値で推移した前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った。
	ねぎ（白ねぎ） 	長野産を中心に、主力の鳥取産や北海道産などの入荷があった。各産地とも潤沢な入荷が続き、長野産と鳥取産の月間の入荷量は前年の1.5倍以上となった。月間全体の入荷量も前年をかなり上回った。 価格は、消費地の気温が高く引き合いが強まらない中で、販売に苦戦し低迷した。月間の価格は、前年をかなり下回った。
	ねぎ（青ねぎ） 	青ねぎは、徳島産を中心に香川産や鳥取産、高知産などの入荷があった。細ねぎは、高知産が中心となる入荷であった。主力の徳島産は、上旬までは生育が良く順調な出荷であったが、病害虫の発生が見られ、中・下旬は出荷量が少ない状況が続き、減量した。香川産も全旬を通じて入荷量が少ない状況が続き、これを補うために鳥取産や愛媛産などが増えたが十分ではなく、月間では前年を下回った。 価格は、絶対量不足から旬を追うごとに高騰し、高値で推移した。月間の価格は前年を大きく上回った。
	ブロッコリー 	上・中旬は長野産と北海道産が主体となる入荷で、下旬から石川産の入荷が始まり、長野産とともに主体となった。北海道産は下旬に切り上がった。長野産と北海道産は、前月までの曇天の影響で生育が進まなかったものが回復して、出荷されてきたため産地残量が多く、特に長野産が多く、月間では前年の2倍もの入荷量となった。石川産も順調に出荷が開始し、月間全体の入荷量は、前年をかなり大きく上回り、平年をやや上回った。 価格は、上旬までは前月までの不足感が残り高値でスタートしたが、入荷増量に伴い旬を追うごとに下落し、月間の価格は前年をかなりの程度下回り、平年をやや上回った。
	レタス類 	玉レタスは長野産が中心となる入荷で、下旬からラップ物の兵庫産の入荷が始まった。長野産は、前月までの悪天候続きの影響で産地の残量が少なく切り上がりも早かったため、旬を追うごとに減少し月間では前年を下回った。兵庫産は順調なスタートとなったが、月間では前年をかなり下回った。サニーレタスは長野産が中心で、後続の福岡産の入荷もスタートした。玉レタス同様に前月までの悪天候の影響で産地の残量が少なく、数量が少ない状況が続き、月間では前年を大幅に下回った。リーフレタスも玉レタス、サニーレタス同様に、長野産が前月までの悪天候の影響で産地の残量が少なく、後続の福岡産がスタートする中でも数量は少ない状況が続いた。レタス類全体の月間入荷量は、前年、平年とも3割近く下回った。 価格は、玉レタス、サニーレタス、リーフレタスとも不足感から高値で推移した。後続産地の入荷がスタートし、旬を追うごとに下落はしたものの、月間の価格は前年を8割以上上回り、平年を7割近く上回った。

果菜類	きゅうり 	主体となったのは宮崎産、群馬産、大阪産で、山形産などの入荷もあった。宮崎産は潤沢だったが、他産地は天候が安定せずに不安定な入荷となり、数量は伸びなかった。月間全体の入荷量は、前年並みの入荷量で、平年をかなりの程度下回った。 価格は、特売需要などで引き合いがあり、月間では前年をかなりの程度上回る価格となり、平年を2割近く上回った。
	なす 	千両系は、高知産が中心で岡山産や京都産などの入荷もあった。長茄子は、主力の熊本産と福岡産を中心に愛媛産の残量の入荷があった。月の前半は天候が安定せず出荷が不安定な中でも、消費地の気温が高く引き合いがあり、少ないながらも入荷量は前年並みを維持した。後続産地の出遅れから中旬は伸びなかったが、下旬から回復して本格的な入荷となった。月間全体の入荷量は、前年をややわずかに下回り、平年をわずかに上回った。 価格は、不足感に加えて消費地の気温が高く引き合いがあったことから、高値で推移した。後続産地のスタートに向けて旬を追うごとに微減傾向だったが、月間の価格は前年を大幅に上回り、平年を2割以上上回った。
	トマト 	主力の岐阜産を中心に、岡山産の入荷や後続の愛知産の入荷などがあった。夏秋産地の切り上がりが早く、岐阜産の入荷は全旬とも少ない状況が続き、前年を大幅に下回った。他産地は潤沢な入荷が続いたことから、月間全体の入荷量は前年を2割強上回り、平年を3割近く上回った。 価格は、需要が伸びず、高値だった前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度下回った。
	ピーマン 	宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。夏秋産地は、残量が多く潤沢な入荷が続いた。前年も多かったため、月間全体の入荷量は前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は、消費地の気温が高く引き合いもあり、高値で推移した。月間では前年をかなり上回り、平年を2割以上上回った。
土物類	ばれいしょ 	丸芋は北海道産の入荷であった。前月上旬の降雨の影響で生育不良や腐敗による品質低下が多く、中旬以降は産地からの出荷量が減少し、月間では前年を下回った。メークインは北海道産の入荷となり、順調な出荷が続いたことから月間では前年の2倍以上となった。ばれいしょ全体の月間入荷量は前年をかなり上回り、平年もわずかに上回った。 価格は、丸芋、メークインとも、売れ行きが悪く需要も伸び悩み、安値で推移した。月間では前年を4割近く下回ったが、平年をわずかに上回った。
	さといも 	愛媛産が中心の入荷で、前半は宮崎産の残量入荷もあった。給食や生協などから一定の引き合いがあり、安定した入荷が続いた。輸入の中国産の入荷もあり、業務関係を中心に需要が高く、入荷量は前年を大幅に上回った。月間全体の入荷量は、前年をやや上回り、平年を2割以上下回った。 価格は、売り先から一定の引き合いがあったため、全旬とも安定した価格で推移した。月間では、前年をややわずかに下回り、平年を2割以上上回った。
	たまねぎ 	北海道産を中心に兵庫産の入荷があった。北海道産は豊作で出荷量が多く、潤沢な入荷が続き、月間の入荷量は前年の2倍近くにまでになった。兵庫産は、単価安もあって控えめな入荷が続き、月間の入荷量は前年の半分程度となった。月間全体の入荷量は、前年を3割近く上回り、平年をやや上回った。 価格は、入荷量が多いことから安値で推移し、商談価格を下げての特売対応をしたことなどが価格を押し下げ、月間の価格は、前年の半値以下となり、平年を3割近く下回った。

（執筆者：東果大阪株式会社　新開　茂樹）

（参考）　指定野菜（15品目）の卸売価格の推移（東京都中央卸売市場）

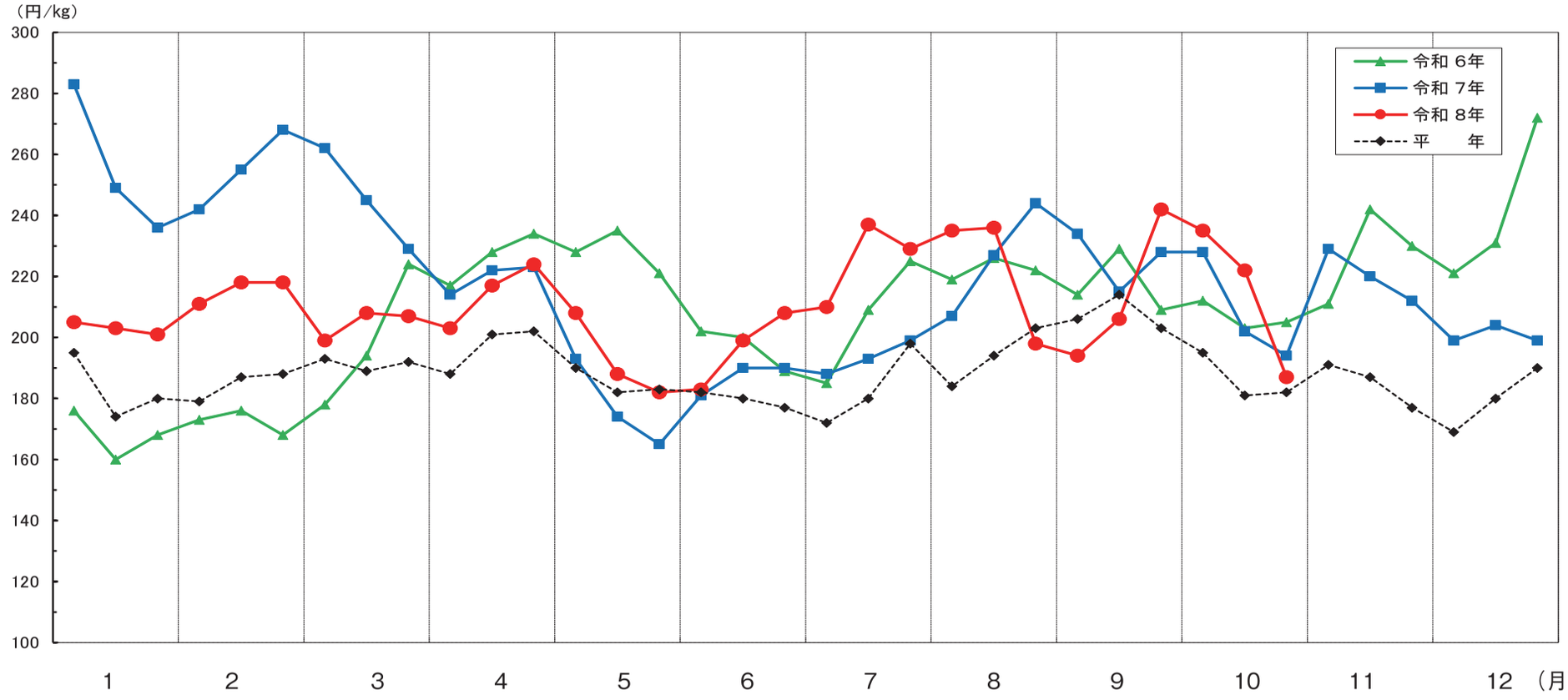


（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和６年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	249	240	245	237	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295
令和７年	306	279	260	257	274	285	290	270	253	236	236	235	212	205	191	196	206	199	204	199	211	211	232	249	243	233	246	242	212	196	236	236	222	215	220	237
令和８年	222	215	210	229	231	233	215	221	223	230	236	238	233	219	200	204	223	228	235	251	244	255	255	211	216	236	277	275	264	220						
平　　年	214	193	199	200	210	211	216	213	215	211	218	216	214	206	202	200	202	193	191	192	194	194	204	219	226	238	223	216	202	191	199	193	187	183	199	216

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（令和３年～７年）の旬別価格の平均値である。
注２：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の４市場のデータである。
注３：令和８年６月号（４月実績掲載分）以降、指定野菜はブロッコリーを含む15品目のデータである。なお、平年、令和６年、７年のデータもブロッコリーを含む。

（参考）　指定野菜（15品目）の卸売価格の推移（大阪市中央卸売市場）



（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和６年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201	206	237	226	216	225	264
令和７年	278	245	231	238	249	263	259	243	227	211	218	220	190	170	161	175	185	185	183	189	195	203	224	241	230	211	224	223	198	189	222	214	207	194	198	195
令和８年	201	198	197	207	215	215	196	204	203	203	217	224	208	188	182	183	199	208	210	237	229	235	236	198	194	206	242	235	222	187						
平　　年	191	171	176	176	183	184	189	187	190	185	198	198	187	179	179	176	176	173	167	175	194	180	190	200	202	209	198	191	177	177	187	183	173	166	176	186

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（令和３年～７年）の旬別価格の平均値である。
注２：大阪本場および大阪東部市場のデータである。
注３：令和８年６月号（４月実績掲載分）以降、指定野菜はブロッコリーを含む15品目のデータである。なお、平年、令和６年、７年のデータもブロッコリーを含む。